

しずおか 水土里 フォーラム

主催：農林水産省関東農政局、静岡県、水土里ネット静岡
静岡新聞社・静岡放送、全国地方新聞社連合会
後援：関東一都九県土地改良事業団体連合会協議会

再発見！女性が語るふるさとしずおかの水土里

静岡県は、温暖な気候と豊かな水資源、変化に富む地形、さらには恵まれた立地条件を活かし、お茶やみかん、野菜、お米、花など、いろいろな農産物が生産される重要な食糧基地となっております。また静岡県の農村には、農業用水(水)や農地(土)といった農業生産基盤、豊かな自然環境、美しい田園風景、農業者を含めた地域住民の生活の場(里)など、人々の長い営みの中で形成されてきたいろいろな資源がたくさんあります。これら「しずおかの水土里(みどり)」の恩恵を再認識し、その役割を次世代に伝えていくことを目的に、「しずおか水土里フォーラム」を平成19年3月3日(土)、静岡県静岡市のグランシップで開催し、県内外から約400名が参加しました。このフォーラムでは、基調講演も含め県内外で活躍されている5名の女性から、「再発見！女性が語るふるさとしずおかの水土里」と題し、日ごろの熱い思いを女性の視点から語っていただきました。

主催者代表 あいさつ



伊藤 関東農政局長



村松 静岡県
農業水産部長

基調講演

『ふるさと資源と水の記憶』

基調講演では、十文字学園女子大学助教授の宮城先生から、ふるさと資源について、「長い歴史の中で形成、維持されてきた」、「動かすことができない」、「国民全体の社会的共通資本である」、「いったん壊してしまうと、復元に長い時間と多大な費用がかかる」といった4つの特徴と、「食と農を支える基盤」、「田園的自然の形成」、「生態系の保全」、「景観の形成」、「健全な水・物質循環の形成」、「国土の保全」という6つの役割を紹介していただきました。また、「農地や農業用水を保全するには地域住民を含めた新たなコミュニティをつくる必要がある」と地域の連携の必要性について指摘されました。

宮城 道子

十文字学園女子大学人間生活学部助教授



●みやき みちこ●

東京女子大学文理学部心理学科卒業。(社)地域社会計画センター研究員を経て1993年十文字学園女子短期大学家政学科専任講師、同社会情報学部コミュニケーション学科を経て現在に至る。農地・農業用水等の資源保全施策検討委員、農林水産祭中央審査委員会委員、農林水産省独立行政法人評価委員会委員など多数歴任。著書に「農村ではじめる女性起業-もうひとつの夢づくり-」などがある。

パネルディスカッションでは、基調講演をした宮城助教授、行政のコメンテーター山下農村振興局次長のほか、さまざまな分野で活躍する女性たちが、都会の人たちや次世代を担う子供たちへ水土里の役割や大切さを伝えようと、その熱い思いを語り、意見交換を行いました。



名倉 光子

NPOとうもんの会主宰

農業は悪いことばかりじゃない。楽しいことがいっぱい。生産農業から加工販売農業に変わっている。女の人たちが一生懸命やる気を出して取り組んでいる。農業が出来るようにならないと、水土里も守られない。地域の農産物を食べて欲しい。農家もがんばっている、何か手伝うことはないかとサポートして、静岡の水土里を地域で盛り上げてほしい。



●なぐら みつこ●

静岡県生まれ。掛川市にて就農。1996年度静岡県「農山漁村ときめき女性」、2000年度静岡県農業経営士に認定。掛川市農業委員会委員、NPOとうもんの会主宰も務め、現在に至る。NPOとうもんの会では、農業や農村の体験交流等に関する活動を行っている。

服部 温子

大井川右岸土地改良区職員

地域の皆さんに農業用水の大切さを知ってもらおうと「21世紀土地改良区創造運動」という広報活動を展開している。地域で農業用水を守っていくような活動にしていきたい。特に、子どもたちには、水の大切さや農業の大切さを伝えていきたい。



●はっとり あつこ●

静岡県生まれ。菊川市役所勤務を経て、2001年大井川右岸土地改良区に務め、現在に至る。子供や地域住民に土地改良区の活動について啓発活動(21世紀土地改良区創造運動)を行っている。

上原 佐恵子

伊豆おはなし連絡会代表

昔話は農耕とストレートに結びついており、語ることに聞くことに実在感があったと思う。しかし、生活様式や価値観が大きく変化している今、“地域の文化遺産である昔話”を次世代の子供たちに、どのように語り継いでゆくのか。私達、活動家にとって大切な課題であり、これからも努力を続けたい。



●うえはら さえこ●

東京都生まれ。1987年より伊豆地方に在住。1990年伊豆おはなしの会結成後代表となる。現在、伊豆おはなし連絡会代表、かたりいず運営委員長、しずおか紙芝居研究会主宰、静岡県読み聞かせネットワーク委員を務める。

織作 峰子

写真家

外国に行くと、子どもがよく働く。親の手伝いをする。お母さんの横で焼いたパンケーキを売っている。子どもたちが自然に農業を受け継ぐ仕組みが必要。また地域も映像的に色があったり美しければ、それを撮るため、絵を描くために人が集まったり、散歩に集まったりする。



●おりさく みねこ●

1981年ミスユニバース日本代表に選ばれ、任期終了後ただちに写真家を志すようになる。1982年に大竹スタジオ入門後、1987年独立。美しき国スイスの小さな村々を訪ね歩いた写真集「MYSWITERLAND」など作品多数。「疏水百選」選定委員会委員。

山下 一仁

農林水産省農村振興局次長

欧米の農業と違い、東アジアの水田は毎年稲を植えて同じ収穫量がある。水が上流の栄養分を含んだ森から水田に流れ、農業をやった後の悪い成分は水が流してくれる。日本及び東アジアは、水という資源を極めてうまく使っている。昔は、農家が農地、水資源を維持してきた。農家が少なくなり、農地、水資源を誰が維持するのか。ふるさと資源を守っていくか、それを支援するのが行政の課題。



●やました かずひと●

1977年農林水産省入省。2006年農村振興局整備部長を経て、2007年から現職。日本経済新聞・経済教室への執筆やNHKラジオ「ビジネス展望」に出演し経済情報を解説するなどエコノミストとしても活躍。

コーディネーター
鈴木 理久

静岡新聞社編集局出稿部長



●すずき まさひさ●

1974年静岡新聞社入社。袋井、島田、焼津、富士の各支局記者から社会部副部長、浜松総局編集部長を経て現職。

展示コーナー、プレゼント

会場では展示コーナーを設置。全国40万kmにわたる農業用水路から、農業振興、歴史、景観等の観点で選定された疏水百選。また農地や農業用水、環境などの資源の保全に関するパネルなどを展示。開演前や休憩中に立ち寄る来場者が多くいま



した。フォーラム終了後、来場者全員に「ふるさと特産品」として芽キャベツ、柿田川の水、清水産「はるみ」、ほお葉餅をプレゼントしました。さらに、受付で配布した資料に引換券が入っていた来場者50名には、「御殿場コシヒカリ2kg」をプレゼントしました。